

接尾辞 *-able* の考察—認知メカニズムの観点から*

高橋 勝 忠
海見 沙 織

0. はじめに

接尾辞 *-able* の意味を考えると、非常に興味深い現象がある。例えば、*readable* は「読むことができる」の他に「読んで面白い」といった意味があり、*drinkable* には「飲むことができる」の他に「飲むのに適した、飲んでおいしい」という意味が存在する。共に後者の意味は、単に基体と接尾辞の意味を組み合わせるだけでは予測することが困難な拡張された意味を持っている。本論では、他動詞に付加する接尾辞 *-able* (*V-able*) に焦点を当て、その意味拡張の方向性について考察する。

1. *V-able* のプロトタイプの意味と意味拡張

まず、接尾辞 *-able* のプロトタイプの意味と意味拡張について確認しよう。プロトタイプの意味とは、ある語の中で一番基本的な意味のことであり、最も制約が少なく自由に使えるという特徴を持っている。意味拡張とは、プロトタイプの意味からより特異な意味へ変化し、使用に制限がかかることをいう。*V-able* のプロトタイプの意味と拡張された意味は、次のようにまとめられる。

(1)

<i>V-able</i>	〈プロトタイプの意味〉	〈拡張された意味〉
<i>readable</i>	読まれることができる (読める)	読んで面白い
<i>drinkable</i>	飲まれることができる (飲める)	飲んでおいしい、 飲むのに適した

teachable	教えられることができる (教えられる)	よく教えを聞く、 学習能力のある
washable	洗われることができる (洗える)	洗濯のきく
comparable	比較されることができる (比較できる)	似ている
eatable	食べられることができる (食べられる)	食べるのに適した
livable	住まれることができる (住める)	住むのに適した

(1)からも分かるように、V-able のプロトタイプの意味は「…されることができる」であり、拡張された意味はプロトタイプの意味と比べて、+ α の意味を持つようになる。これは、使用の面から見ても明らかである¹。

- (2) a. Water/Hydrochloric acid is drinkable.
b. Water/ *Hydrochloric acid is drinkable.

(2a) は、プロトタイプの意味の「飲める」という意味である。(2a) では、水も塩酸も飲もうと思えば飲むことができる。しかしながら、(2b) の拡張された「飲んでおいしい」という意味になると、塩酸の方は飲料用ではないため容認されなくなる。

接尾辞 -able の意味について、竝木 (1987) は次のようにまとめている。

- (3)
- ① 「…されることができる (受身+可能)」
e. g. avoidable, drinkable, understandable, reachable
 - ② 「…するに適した、…する価値がある (能動+可能)」
e. g. laudable, admirable
 - ③ 「…されるべきである (受身+当然)」
e. g. punishable, deplorable, blamable, regrettable
 - ④ 「…しやすい (傾向)」
e. g. fatiguable, changeable, perishable, variable
 - ⑤ その他

e. g. knowledgeable (博識の), sizable (かなりの), fashionable (流行の), copyrightable (著作権を取得できる)

(3)の④「…しやすい(傾向)」は、接尾辞 *-able* が基体に自動詞または名詞をとった場合の意味で、⑤のその他は名詞の場合なのでここでは言及しない。すると、本論で焦点を当てている他動詞を基体にとる接尾辞 *-able* の意味は(3)の①から③までということになり、①「…されることがができる(受身+可能)」がプロトタイプの意味、②「…するに適した、…する価値がある(能動+可能)」と③「…されるべきである(受身+当然)」が意味拡張ということになる。竝木(1987)は、意味拡張の②と③は基体動詞の評価性に基づき分類している。それによると、②の意味を持つ接尾辞 *-able* の基体動詞は *laud* や *admire* などプラス評価を含意し、反対に③の意味を持つ接尾辞 *-able* の基体動詞は *punish* や *blame* などマイナス評価を含意している。したがって、基体動詞がプラスかマイナスかによって拡張された意味を捉えることができることになる。しかしながら、反例も見つかる。例えば、*readable/drinkable* は「読む／飲む価値がある」という②の意味に分類されるが、その基体動詞の評価性はというとプラスやマイナスを持たない中立である。また、*honorable/respectable* はどちらも「尊敬すべき」という③の意味であるが、基体動詞の評価性はマイナスではなくプラスになっていることが指摘できる。よって、基体動詞の評価性に基づく分類では意味拡張を説明することは難しいことが言える。

2. 仮説と分析

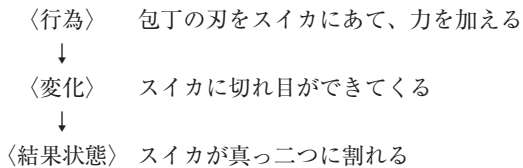
それでは、意味拡張はどのように捉えることができるだろうか。分析するに当たって一つの仮説を立ててみる。

(4) 拡張した意味を持つ *V-able* の基体動詞は結果状態を含意する。

(4)は基体動詞の意味と接尾辞の意味を組み合わせただけでは捉えられない意味の V-able は、その動詞の結果状態が現れているからではないか、というものである。

結果状態とは何か—まず動詞の意味特性から見ていくことにしよう。例えば、「切る」という動詞には、認知的に捉えると次のようなプロセスがある。

(5)ジョンは包丁でスイカを真っ二つに切る



「切る」という動作は一瞬で終わるが、スローモーションにして見てみると3つのプロセスが存在する。まず、ジョンが包丁を持ってスイカを切ろうとする〈行為〉の段階、そして、包丁がスイカに入っていく徐々に切れ目が深くなっていく〈変化〉の段階、そして、ついに包丁が最後まで入りスイカが二つに割れる—つまり、「切る」という動作により生じる〈結果状態〉の段階である。このように、〈行為〉→〈変化〉→〈結果状態〉の行為連鎖を持つ動詞を一般的に達成動詞と呼ぶ。

行為連鎖の中で、動詞がどの段階に属するかによって4つに分類することができる。これを抽象的に理論化したものが、語彙概念構造 (LCS) というものである。

- (6) a. 状態動詞 (stative verb)
 [state[y BE AT-]z]
 b. 到達動詞 (achievement verb)
 [event BECOME[state[]y BE-AT[]z]
 c. 活動動詞 (activity verb)

[event []x ACT ON-[]y]

d. 達成動詞 (accomplishment verb)

[event []x ACT ON-[]y] CAUSE [event BECOME [state []y BE AT-[]z]

(影山 1999; 伊藤・杉岡 2002)

(6a) の状態動詞 (stative verb) は BE AT の述語をもち、y は物理的あるいは抽象的に z にあるという意味を表す。ここでの AT は前置詞全般を表している。この類には、存在を表す exist, live (z = 場所) や状態の resemble, flourish, know, 所有の have (z = 所有物) などがある。これは、行為連鎖の〈結果状態〉に当たる。

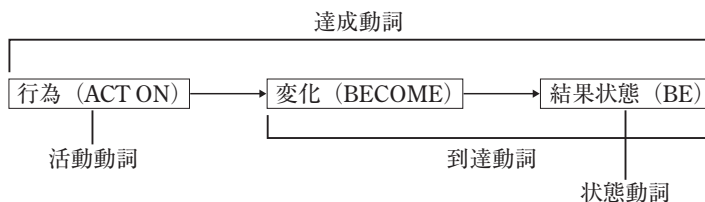
(6b) の到達動詞 (achievement verb) は BECOME の述語に (6a) の状態動詞が組み込まれた形になり、y はある状態へ変化することを表している。ここには、fall, die, emerge などが当てはまり、行為連鎖では〈変化〉→〈結果状態〉の段階に属する。

(6c) の活動動詞 (activity verb) は、ACT-ON という述語を持つ。ただし、ON-[]y (点線部) は任意であることを表し、ACT には walk, run のような自動詞が含まれる。また、ACT-ON には kick the wall, hit the ball など目的語を伴う他動詞がある。活動動詞では、対象物へ変化を与えることは含意されておらず、この点が達成動詞と異なる。よって、活動動詞は〈行為〉のみと捉えることができる。

(6d) の達成動詞 (accomplishment verb) は、CAUSE という述語に (6c) と (6b) が組み込まれたもっとも複雑な形をしている。これは、x の y に対する何らかの活動 (x ACT ON-[]y) が、y が z である状態 ([]y BE AT []z) の変化 (BECOME) を引き起こす (CAUSE) ということを表している。達成動詞には、build a house, break the window などが含まれ、〈行為〉→〈変化〉→〈結果状態〉の過程を持つことになる。

(6)を図式化すると、次のようにまとめられる。

(7)



(6)と(7)に基づき、接尾辞 -able が付加する動詞を分類してみよう。

(8)

動詞の種類	基体 V	V-able
状態動詞	live, like, lament, despise	livable, likable, lamentable, despisable
到達動詞		
活動動詞	read, teach, drink, watch	readable, teachable, drinkable, watchable
達成動詞	build, cut, break	buildable, cuttable, breakable

(8)から、接尾辞 -able の基体は、到達動詞以外の状態・活動・達成動詞と分かる。しかしながら、これでは(4)の仮説が成り立たなくなってしまう。そこで、今度は動詞の違いを明らかにし、接尾辞 -able の基体動詞は結果状態を有することを確認していく。

まず、状態・到達動詞と活動・達成動詞の違いは行為者による意図的な活動 (ACT ON) の有無にあると言える。意図的な活動があるものを [+スル]、ないものを [-スル] と表記する。

(9)*John fell in ill carefully/deliberately.

(10) John read the book carefully/deliberately

(9)は到達動詞、(10)は活動動詞である。意図性を表す *carefully/deliberately* を挿入すると、(9)の「ジョンは入念に／慎重に病気になった」は容認されなくなる。対して、(10)では「ジョンは入念に／慎重に本を読んだ」は変わらず容認される。したがって、状態・到達動詞は意図性を表すことはできない [-スル]、活動動詞・達成動詞は [+スル] という性質を持つことが分かる。

次に、活動動詞と達成動詞の違いを見てみよう。これは、状態の変化 (BECOME) の有無にある。状態の変化があるものを [+ナル]、ないものを [-ナル] と表記する。

- (11) a. John reads books.
 b. John read the books in two hours.
 (12) a. John drinks water.
 b. John drank the water in ten minutes.

(11a) と (12a) は活動動詞であり、単に活動 (ACT ON) のみを表している。そこに *in two hours/in ten minutes* のような副詞句を挿入すると、(11b) と (12b) は状態の変化が現れ、結果状態を含む達成動詞になる。よって、活動動詞は修飾句により [-ナル] から [+ナル] へと変化することが分かる。これにより、(8)の表で分類された活動動詞は、結果状態 (BE) を有する達成動詞になることが確認できた。

しかしながら、ここでまた新たな問題点が上がる。それは、状態動詞は [+スル] [+ナル] の性質を持たないということである。状態動詞は本来、[-スル] [-ナル] であるため、下記のような文は不適切となる。

- (13)*John likes your son carefully/deliberately.
 (14)*John likes your son in ten minutes.

ここで再分析として、影山 (2001: 220) の自己制御性 (controllability) が関連すると思われる。自己統御性とは、動詞の主語が意識して、その行為を

コントロールすることである。

(15) John {was able to} like your son.

(16) John {was able to} live in Chicago.

このように状態動詞であっても、be able to を付加することによって、主語の意図を表す [+スル] 動詞にすることができる。また、副詞句を挿入すれば [+ナル] 動詞にすることができる。

(17) John was able to like your son in ten minutes.

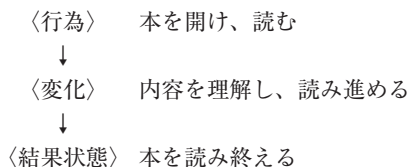
(18) John was able to live in Chicago in two years.

(17)や(18)では、「好きになろう」や「住もう」という行為 (ACT ON) が押し進められ、「好きになる」や「住む」という結果状態 (BE) を有するようになる。これにより、接尾辞 -able が付加する基体動詞は、全て〈行為〉→〈変化〉→〈結果状態〉を持つということが明らかになった。

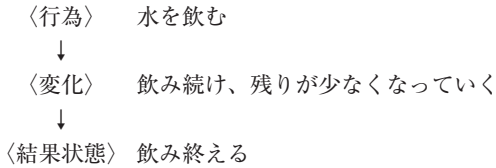
それでは、readable の「読むことができる」と「読んで面白い」や drinkable の「飲める」と「おいしく飲める」の意味関係はどう捉えることができるのか。

read と drink は、共に次のようなプロセスを持つ。

(19) John reads the books.

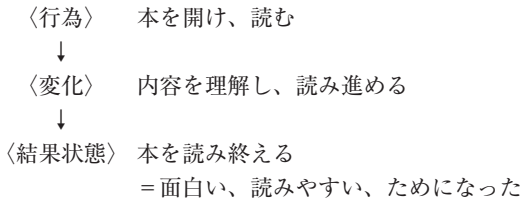


(20) John drinks water.

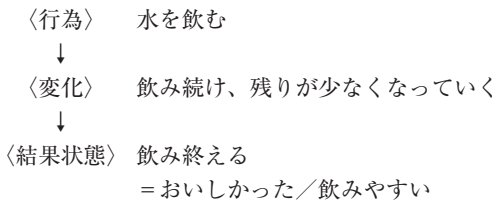


(19)と(20)の結果状態は、その動作の結果の感想を持つはずである。例えば、(19)では、その本を読んだ結果「面白かった／読みやすかった／ためになった」などが出てくるであろう。(20)では、水を飲んだ結果「おいしかった／飲みやすかった」などを表すであろう。この達成動詞の結果状態の部分は、接尾辞 *-able* を付加することで引き出されるものと考えることができる。

(21) The book is readable.



(22) The water is drinkable.



つまり、プロトタイプの意味は行為の部分に焦点をあて、意味拡張された意味は結果状態の部分に焦点を当てていることになる。意味拡張の方向性を特

徴づける一つの方法として、行為—動作の起点か結果状態—行為の着点かどうかが挙げられる。我々の視点は、動作の一部に焦点を当て、言語化しているということが言える。

注

※本稿は10月26日開催の京都女子大学英文学会の席上で海見が同タイトルで口頭発表した内容に加筆修正を行い、発展させたものである。

1. (2a, b) の例は、デイヴィット・リー。2006. 第13章「創造性と意味の性質」『実例で学ぶ認知言語学』(Cognitive Linguistics An Introduction) 大修館書店を参考。

参考文献

- Akmajian, A et al. 1979. *Linguistics: An introduction to Language and Communication*. The MIT Press.
- Croft, W. 2012. *Verbs*. Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundation of Cognitive Grammar Vol. 1: Theoretical prerequisites*. Stanford University Press.
- Lehnert, M. 1971. *Rückläufiges Wörterbuch der englischen Gegenwartssprache*. VEB Verlag Enzyklopädie.
- Levin, B. 1993. *English Verb Classes and Alternations*. University of Chicago Press.
- Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 2002. 『語の仕組みと語形成』研究社出版。
- 岡崎正男・小野塚祐視 2001. 『文法におけるインターフェイス』原口庄輔・中島平三・中村捷・河上誓作 編 (英語学モノグラフシリーズ18) 研究社出版。
- 影山太郎 1996. 『動詞意味論 言語と認知の接点』柴谷方良・西光義弘・影山太郎 [監修] (日英語対照研究シリーズ5) くろしお出版。
- 影山太郎 1999. 『形態論と意味』西光義弘 編 (日英語対照による英語学演習シリーズ2) くろしお出版。
- 影山太郎 2001. 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店。
- 影山太郎・由本陽子 1997. 『語形成と概念構造』中右実 編 (日英語比較選書8) 研究社出版。
- 辻幸夫編 2002. 『認知言語学キーワード事典』研究社出版。
- デイヴィッド・リー 著 宮浦国江 訳。2006. 『実例で学ぶ認知言語学』(Cognitive Linguistics An Introduction) 大修館書店。
- 竝木崇康 1987. 「英語の接尾辞 -able」『茨城大学教育学部紀要』36, 47-64.
- 竝木崇康 1988. 「「可能」という語で終わる日本語の複合語: 接尾辞 -able で終わる英語の派生語との対照」『茨城大学教育学部紀要』37, 53-75.
- 松本曜 編 2003. 『認知意味論』池上嘉彦・河上誓作・山梨正明 [監修] (シリーズ認知言語学入門 第3巻) 大修館書店。
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版。